

などの言語内的要因だけでなく、話者の社会的特徴やスタイルなどの言語外的要因の影響も受け、その出現が予測される。これまでの研究で、変異の出現には言語内的要因がもっとも強力に働くことがわかっているが、変異理論が想定する言語能力には、このような形でことばが使用される「社会」も内在化している。

言語外的要因は社会変数という形で特定される。代表的なものには、性や年齢などの話者属性、階層や民族などの社会集団、社会ネットワークなどの社会構造的変数などがあるが、最近の研究では、P. Eckertの「実践の集団」のように、学校や職場の仲間集団などの流動性の高い社会カテゴリーも変数に認められている。注意すべきは、変数となりうる社会的特徴は、基本的に当該社会の中で目立ったもの、つまり社会の中で人々に意識されるだけの差異をもつという点である。社会的な目立ちは、その背景となる社会的文脈との対照ではじめて意識されるので当然社会ごとに異なるし、社会が異なれば同じ社会カテゴリーでもその意味は同一ではない。そのような中で話者たちは、言語というインターフェイスによって周囲の他者とインタラクションを行いながら、自らの中に社会を内在化させつつ自身の立ち位置を決めていく（別の言い方をすれば、アイデンティティの構築を行う）。言語的条件に加えて、このような過程をへて話者の中に内在化された社会によって、言語変異はその出現に制約を受けることになる。

実践の集団のようなローカルな社会内での目立ちは、アイデンティティの構築と直接かわるため、変異の使用と内在化された社会の関係は比較的見えやすいかたちでとらえられると予想される。しかし、社会的にとくに目立ったものとは思えない年齢のような属性的特徴にも、社会は反映されると考えるべきなのかもしれない。年齢という変数は、話者が生きてきた時間の長さだけでなく、通り過ぎた「時代」をその背景に持っている。話者たちはライフコースの中で、その時代の影響を少なからず受ける。時代とは、すなわちそのときの社会でもある。同じだけ年齢を重ねても、時代がちがえば話者の中に内面化される社会は異なるはずである。このように考えると、年齢は単に時間の長さを意味するのではなく、むしろ話者が過ごしたそのときどきの社会を反映するものと考えられるべきかもしれない。先日ある研究会で、松田謙次郎さんが、言語変化の研究には年齢を変数とした経年変化だけではなく、世代間（コウホート）効果も考慮すべきではないかというご指摘をされたが、このような視点は、時代の影響を変異分析に取り込む具体的方策につながるように思う。

具体的な研究成果の「最前線」ではなくなってきたが、変異理論がこれまで以上に「社会」を組み込むべきという筆者の愚見はお伝えすることができたかと思う。実際、L. MilroyやP. Kerswillらの最近の研究報告には、社会と言語の接点である言語イデオロギーの言語変化への影響にかんする言及が見られる。しかしながら、その理論化は進んでいない。このような例を見ると、変異理論はさらに社会を意識することで、言語人類学や談話研究などの隣接領域と相互協力する道も開けるのではないかと感じている。

■□ [03] 第 19 回大会のお知らせ ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

社会言語科学会の第 19 回大会は、以下の予定で行われます。

【日時】 2007 年 3 月 3 日（土）、4 日（日）

【場所】 日本大学文理学部（〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40）

http://www.chs.nihon-u.ac.jp/index-con/info_f.html

【交通】 京王線「下高井戸」あるいは「桜上水」下車、徒歩 8 分

○ シンポジウム

「社会言語学における『人の社会的属性』の扱いを問い直す」

企画責任者：日高水穂（秋田大学）

- ・基調講演：「『役割語』研究と社会言語学の接点」

金水敏（大阪大学）

- ・「言語変種」分野：「着脱される『属性』－方言『おもちゃ化』現象－」

田中ゆかり（日本大学）

- ・「言語行動」分野：「言語行動と『属性』」

熊谷智子（国立国語研究所）

- ・「言語意識」分野：「言語意識と『属性』」

松丸真大（大阪大学）

○ 招待講演

「顔面表情認知における情報処理過程」

講師：山田寛（日本大学）

○ テーマ講演

「新方言・若者語・世代語の性格」

講師：井上史雄（明海大学）

○ 徳川賞授賞式・徳川賞講演

「中国延辺朝鮮語の聞き手待遇について－『hao体』を中心に－」

萌芽賞：千 恵蘭（放送大学）

「会話参加者間の社会的関係による感動詞の音声的特徴－応答における『あ』のバリ
エーション－」

萌芽賞：須藤 潤（大阪外国語大学）

※ プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください。

<http://www.wdc-jp.com/jass/19/>

◎ 博士を取得された方は、題目、氏名、連絡先、学校名・研究科名、取得した年月、概要(150 字程度)を事業委員会 (jassjig2@gmail.com (*))までご連絡ください。ニュースレターにてご紹介させていただきます。

(*) プログラムによるアドレスの自動収集を避けるため、@は全角になっています。半角にして置き換えてお使いください。

■□ [05] 第 6 回徳川宗賢賞受賞者決定 ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

このたび、第 6 回 (2006 年度) 徳川宗賢賞受賞論文として次の 2 論文が選考されました。

萌芽賞 (『社会言語科学』掲載順)

○ 「中国延辺朝鮮語の聞き手待遇について - 「hao 体」を中心に - 」

『社会言語科学』第 8 巻第 1 号 (2006) 57 頁 - 68 頁

千恵蘭 (放送大学非常勤講師)

○ 「会話参加者間の社会的関係による感動詞の音声的特徴 - 応答における「あ」のバリエーション - 」

『社会言語科学』第 8 巻第 1 号 (2006) 181 頁 - 192 頁

須藤潤 (大阪外国語大学大学院博士後期課程)

優秀賞 該当なし

各受賞者にそれぞれ賞状と副賞 10 万円が贈られます。

(*) 徳川宗賢賞は 2004 年度より「優秀賞」と「萌芽賞」の 2 賞になっています。

賞の趣旨は、学会ホームページ

http://www.jass.ne.jp/tokugawa/tokugawa_kitei.htm

をご覧ください。

◀授賞理由▶

○ 「中国延辺朝鮮語の聞き手待遇について - 「hao 体」を中心に - 」

千恵蘭

中国延辺地方の朝鮮族が日常的に話すことば（延辺朝鮮語）における待遇表現，特に文末の聞き手待遇形式を取り上げ，アンケート調査をもとにその使用状況を分析した論文である。本論文では文末形式の中でも最も使用率の高い hao 体の使用条件を中心に考察している。これまで延辺朝鮮語に関する詳細な分析はほとんどなされておらず，調査によって得られた資料をもとに詳細な分析を行ったことが評価された。さらに，本論文は hao 体の使用状況の分析にとどまらず，その使われ方が中国で教えられている標準朝鮮語（中国朝鮮語）や韓国で使われている朝鮮語（韓国ソウル語）と異なっていることを明らかにしている。このことは，韓国との交流の断絶や中国語との言語接触が言語使用に大きな影響を与えていることを示唆するものであり，本論文の評価を高めた。

○「会話参加者間の社会的関係による感動詞の音声的特徴—応答における「あ」のバリエーション—」

須藤潤

感動詞「あ」に着目し，「あ」のもつ音声的特徴と聞き手の判断する「あ」の社会的な機能に着目した実験を行い，「あ」の高さや長さの変化が相手との関係による緊張と配慮とに関係するという仮説を立てて，「あ」の周波数の高さや長さを変化させて，被験者 20 年代～30 年代に聞かせ，「あ」の周波数の高さや長さにより被験者の解釈が「相手が自分より上」，「同等」，「親しい」，「初対面」など異なることを実証した論文である。発話と社会性との関係についての研究は語や文のレベルの研究は多いが，このように音声という言語レベルで一番小さな単位を扱いそこに人間の社会性を結びつけた研究は多くはない。また，その研究の方法論の妥当性，信頼性も高く，結果の考察も緻密である。以上のように，音声レベルの社会的関係性という着目点と音声実験という方法論は新鮮な研究といえる。ただし，「あ」のもつ社会的な特徴として「緊張」と「相手への配慮」だけに絞り，他の特徴が考慮されていない点には課題が残る。これからの氏の研究の発展を期待したい。

◀徳川賞を受賞して▶

千恵蘭

初めて社会言語科学会に投稿し掲載された論文が，徳川宗賢賞萌芽賞を受賞したことに，嬉しいと同時に大変驚いています。研究活動において，数々の貴重なご助言・ご指導をいただきました大学院指導教官の生越直樹教授にこの場を借りて深く感謝申し上げます。また，厳しくかつ丁寧に査読していただきました日比谷潤子編集委員長をはじめとする社会言語科学会の査読委員の先生方々にも厚くお礼申し上げます。

振り返れば，東京大学大学院修士課程一年の時に，生まれ育った故郷の言葉を研究テー

マに選んで以来、いきづまり、テーマに疑問を感じたり、続けていく自信が無くなったりしたことも一度や二度ではありませんでした。それでもここまでくることができたのは、先生や研究仲間、調査に協力していただいた多くの延辺のインフォーマントの方々、それと延辺に住む両親の応援があったからこそだと思います。

これからは今回の受賞を励みにして、調査・研究に邁進していきたいと思います。

須藤潤

「あ」と出会ったのは、大学3年の冬、テレビ番組の会話を文字化しながら学期末レポートのテーマを考えていた時でした。発話の冒頭に「あ」が多く目についた、という単純な動機でレポートを書き始めました。もちろん、当時はレポートさえ書ければよかったので、大学院へ進学する、ましてや、賞がいただけるとは夢にも思っていませんでした。

このレポートを興味深いと評価して下さった筒井佐代先生には、会話分析の面白さを教えていただき、それがきっかけとなり研究者として歩むこととなりました。そして、音声という感動詞研究の新たな視点を与えて下さった郡史郎先生には、私のロシア滞在中にもメールで繰り返しご指導いただきました。指導教官として研究者のいろはを教えてくださいました両先生、調査にご協力下さった多くの方々、そして、社会言語科学会の先生方に対して、この場を借りて厚くお礼申し上げます。いつか実を結べるよう、この「萌芽」を精一杯育てていきたいと思います。



2007年2月13日
社会言語科学会事業委員会発行